オペレッタ ベスト4
藤田妙子著
B5判・188頁・定価2,000円

飛翔する多彩なファンタジー、軽妙で思わぬふきだしたくなる内容、最も強調したいことは、それは、作品が全員参加を前提にわかれていって、出演する子どもの誰もが主役であり、力いっぱい表現できること。
プロットと歌と身体表現、それに伴奏がみごとにとけあって、子どもの欲求にぴったりであること。詩と音楽、踊りと劇、絵と工作がすべて含まれており、子どもの生活経験を豊かにする表現教育の題材として最適であること。この生命がかかった魅力的なオペレッタを子どもたちとともに楽しんでください。

幼児指導の基礎 ●イラスト資料
全国幼稚園教育研究協議会編著 B5判・144頁・定価1,600円

幼児園において幼児を指導する際に、教師は、人としての基礎、基本を身につけたようにすることが大切です。そのためには、教師自身が、指導の意味を確信にし、自信もって、的確かつ効果的に指導できるようにすることが必要でしょう。本書は、その内容をイラストでわかりやすく説明しています。

①指導上のちょっとしたことでも、不安な事柄について正しい確かな方法や手当てが、わかりやすく説明してあります。
②新人保育者の参考書としても役立ちます。
③幼児教育を学ぶ学生、実習生のテキストとしても最適です。

くわしくはフレーベル館代理店・特別店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。
子どもの心と成長を考える
キッズブックス
フレーベル館
幼児の教育

第八十六巻  第十一号
この報告書は、一九七九年の第六回欧州教育関係会議における文書の要約付文献目録である。

私の学前教育に関する文書の要約付文献目録であるが、方策の技術的なことにはほとんどふれず、これらの会議で共通理解となった考え方を主として述べられている。個人やグループだけの見解ではなく、またひとつの国の指針でもなく、欧州十数カ国の連合体の共同作業の結果として生まれたものであるが、方策の日本及びアジアの現状を照して、驚くべきことと思う。

一、学前教育の特色

はじめに一九〇〇年、すなわち、昭和四十五年当時のヨーロッパの学前教育の特性を述べる。ここでは私の次の四つの点からその内容を紹介する。一・学前教育の特性、二・社会変化と学前教育、三・新しい考え方、四・一九〇〇年代ヨーロッパ社会の幼児教育とは異っていることが述べられる。ペスタロッチ、フレーベル等の考え方、およ
三、社会変化と就学前教育

－就学前教育はまた、ヨーロッパの現代社会の状況と密接に関連している。都市化、職場近い場所に人口が集中する点は、またお隣のしつつある。住環境、遊び場の減少、家族の移動、小家族化、離婚の増加、女性の地位の変化、母親の就労等は、子どもと生活環境をも変える存在を必要とする。その結果、家庭の外に、幼児の保育・教育（care and education）の施設をつくる要望が増大している。－（第三章P.15）

－両親が働く子どもたちの施設では、ケア（care）がなされるけれども、就学前教育の主たる機能は教育であって、子どもの幼少期を教育するということではない。それは子どもの人間的発達のあらゆる面を含む全人教育（total education）である。－（第三章P.17）
はるか彼岸の花、彼に見えるのに今日も lange だけfprintf(0,"日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日もな一日も

（日付）
三、新しい考え方

一九六〇年代から七〇年代の就学前教育は、相関する二つの原理にもとづいていた。それは「社会的・環境的要因が、教育における子どもの成功失敗に大きな影響を及ぼすこと」（第五章P. 21）

の二つである。すなわち、子どもの発達には環境が大きな役を果し、とくに幼児期の経験は大人に至るまで影響が大きいこと、逆にい

うならば、幼児期にわるい環境にある子どもには、早からそれを補うための訓練をせねばならないという。
このようなレッテルは、いまや、過度の単純化とみなされている。教育上の失敗の責任は、家庭の背景に帰することは、その過程における最も重要な要因、すなわち学校制度自体を無視している。（第五章 P.21）

正常、異常、早い、遅い、問題性等を判断する規準は、その社会の多数者の支配的価値に合わずに教育するだけでは一方的である。彼らも文化に寄与する一員であるならば、文化もまた小数者の文化を重視し、それを統合するように適応せねばならない。（教育的にいうならば、子どもを学校に適合させるのではなく、学校が適応し、多様な教育を備えなければならない。）（第五章 P.22）

更に、「一九七六年のベルリンにおける会議で『統合（integration）の概念』（第六章 P.23）が論議され、一九八六年には、はじめに述べた『移住者の教育・文化の発達』の五年計画プロジェクトの最終レポートが作られた。このことはきわめて重要なので両者を合わせて別に述べることとしていた。どのようにであろうか、子どもにレッテルを貼り、原因を究明しようとするかぎり、それは一方的な態度であり、その文化自身の発展を望まない。この十年間、ヨーロッパの教育関係者たちは、この点での発想の転換を、教育の実践的改革に努力してきたのをみて、敬意を払うものである。
四、一九八〇年代ヨーロッパ社会の幼児

「就学前教育は、義務教育の前の二、三年の教育を備える以上のものである。この狭く限定された考え方では、六〇年代後半から七〇年代前半には全く正當と思われていたが、七〇年代の末から新しい問題が生じた。」(第〇章 P・35)

その新しい問題とは、子どものみならず家庭全体に影響を与えた社会変化である。その結果、家庭の代わりになる保育施設に対する要請が一層強まった。この点についての基本的考え方では、すでに、二、社会変化と就学前教育のところで述べたことと変わらない。

そして、従来、就学前教育という、三歳から五歳の年令の子どもの「教育」に限りされていたか、いまや出生から幅広い年令にわたって考えねばならなくなった。さらに、子どものことだけを考えるのではなく、親とコミュニティのさまざまな問題や要請をも考慮に入れることができが必要となっている。一九七九年、国際児童年に行われた会議では、これらの四点がテーマに選ばれた。

1. 子どもと家族に影響を与える社会変化に対する就学前のサービス
2. 子どもが必要と権利を確認し、それを守ること
3. 就学前のサービスにコミュニティと親が参加すること
4. 家庭を支える就学前の諸専門機関、保健、社会福祉、教育等の仕事の統合の可能性

これらは一九八〇年代の就学前教育の進む方向を示唆していると云ってよいだろう。この会議では、最後に、「出生から八歳に至る子どもの保育、教育に関する宣言」(Dec
Concerning the Care and Education from Birth to the Age of Eight.

Recommendation NoR (81) 3 of the Council of Europe's Committee of Ministers


P. B. Courcy, France.
第三十一回
こわさと身体

堀内 守

こわいものなし

知人から手紙が来た。五十歳になったという。読んで
いくと、「ですから、もうこわいもの無しです。遠慮なく
言いたいことを言っていくつもりです。」とあった。
なるほど、と思う。ある年齢になると、人はそれまで
の生き方を反省し、一つの区切りをつけたくなるものら
しい。「五十歳」の知人は、そこである決意を表明した
のである。

そういった、何年か前、ある人から同趣旨の手紙をい
ただいた。その方は、六十歳になったことを告げ、「今
までは思い切って発言しなかったから、もう堂々と発言
していくつもりです。還暦にもなれば、世の中にこわい
ものの無しという心境になるものです。」と書いてこられ
た。

二人とも、言い合わせたように、それまでは、いろいろな人やことについて、言いたいことも言うずに腹
におさめてきたということを暗示している。そして、こ
れからはそういう気兼ねなしに、論理の命ずるままに発

---

14 ---
道なき道
地震に雷、火事、オヤジーとよく言われます子。このうち「オヤジー」の序列は今日でずれると下方に押しされて「無意識」の底のなさを説明する遮音にはなりそうわけではない。

どこが、このこと自体がコワイのだと強調する人もいる。その辺から子どもが絡まっている。ちょっと耳を傾けよう。
交通事故、通話、通学適時の事故、園内における事故、実に微に入り細を穿って、われわれのまわりにあり、このようにして定められている。

ジッソンのコウサ
というところまでは、少し気をつけたからだれにもわからない。一連のシステム化されていて、このような場合に限るようなコウサがある。

古代ギリシアの思想家たちは、感覚的に知ることができる。設計の表題を抜き、少しでも深層に近づこうとすると、以下の様々な風景が浮かび上がってくる。

「畏」という方の太っている。そして、何もギリシアの思想家をもつ出さないことも、これらの三層の垂直的アの存在が、決定される。これが「畏」というときの「畏」は、オゾレオコメク、カシコクという畏敬を表している。オゾレイとオソレ、オソレ、オソレ。果てには味方にトリコをもって人間は、超感覚的に行う。周りがあるというを求め、それも文字にして自分の足をを見るという飛躍を鼓行したのであろう。それもを見つめという飛躍を鼓行したのであろう。それもを見つめという飛躍を鼓行したのであろう。
多様な目前のことができて一つの意味を与えている "理"を想定するという離れて考えるのにひとしきった。
この者の一般的呼称は、名詔として読むよりも、文脈に応じて理解するべきセリフに近かろう。「ダメ！」「ダメだよ」「ダメだ」「ダメですよ」「ダメ」「だめだ」「だめだね」「だめですね」「だめなだね」「だめだっってば」「だめ」「だめ」「だめ」「だめ」「だめ」「だめ」「だめ」「だめ」「だめ」「だめ」「だめ」。その使い分け、たいていの人は自分の過去にこれに似たセリフが何回ともなく絡んでいることを記憶しているよう。もし、忘れ去っていなければ、身についたとたん。それまでの労苦の跡は忘れ去られたもよいのである。いや、逆に、どうやって忘れ去られてよいのであるか。それは、まるで、身体の一部、目、耳、口などが消えちまうようなもの。そして、その前もって、新たな目、新たな耳、新たな口が増えたかのように。
先生が「ヨクヤッタネエ」と呼んでくれたとする。以前から、寄せをコトバドりに受けとめて、単純に考えたことになっている。よく見ると、先生はだれででも同じようなことばを発している。のつまり、コトバと態度がカナダシの一にしています。ただ単にわけがいっているだけではなく、格別に「ヨクヤッタネエ」と称さしていられている。まるでそれを「ツキアイ」として、「アイゾ」を言ってみることでは、まるで、単なる「ツキアイ」として、「アイゾ」を言ってみることで、まるで、「ツキアイ」と先生に言われて得意になっていった自分が、ハツカシ……ように、どこまでも、どこまでも視覚にとらわれはじめる時期がある。観念が自分をとらえ、自分をギリギリでさせる。そこを逃れようとすると、観念の世界はますますつぶくみ、それを逃れていく。これが出てくるから、あるのは、「ヨクヤッタネエ」とも言う、世界への飛翔を誘い出す。信や「霊」という世界は、小馬鹿にされている。そこでは、垂直的だった三つの世界「物質界」、「心魂界」、「精神界」は、横に並べられた、「精神」と「物質」の二つに単純化されていく。これが相対的に不安定になるものだから、確かな根拠を「精神」や「物質」の二者択一に求めていき、主観と客観の両者の間で堂々とぐらをする。答えのない堂々とぐらのゲームをしているうちに、それまで小馬鹿にしていった「気兼ね」、「あら疏」のものも意味が見えてくる。鎮座のある「自分」も思いついたものは、実は、そうはいったらあっしょりしていたのではなくて、数々の他人との共に。
近所は、小学校の音楽の教科書を熱心に読み直し、 möglichな存在であることが、それを見るのがコワイから、もういちどツッパリ。
複雑でこぎつける単純化する、性急に、それぞれの感覚である。別に、そのツッパリが、
「数々の他人」というようなレベルから「世間」というようですギャラリーに移り、また「世界」とか「歴史」とか、要するに外部へ移るにつれ、ツッパリ自体がコッケイに思われてくる。
そこで茶化しが生まれ、皮肉が生まれ、ズラリとソラし、が生まれる。一貫した態度というよりは、ツッパリとなっている自分のコッケイさを何とかして見まいという悲し
い演出である。}

味うこと

わが知人の手紙が来た。言い合わされたように、あのお二人からである。だいぶ基調が変わっていった。いろいろと

面白いで、小さな声でうたってみることもある하였습니다。

小さい世界の向うを見つめ直してしまいました。こころにはある宇宙論があり、長い長い助走をして

ついてきたあををうつめ直しています。別の方のもっと大らかであった。

毎朝、老いた夫と杖を頼りに散歩をします。ゆっくり

 Essence — 22 —
わかった。
時がたつ、叱られたことなどは忘れていた。
日常の仕事に夢中になっていただからである。今にして思いたというように。
コライもののゼロなどという状態は、どうにもなさそうで
ない。ゼロよりも、コライものをどう組み替えるかが問題だ。コライものの勝手に物語や遊びに組み替えるかが
子どもを著いていると、そのエネルギーには圧倒される思
いがする。
何がコライ？とインタビューを試みたが、さまざまな
な答えが戻ってきた。
『それや、おかあさん。怒るから』『宇宙怪人と』『エイ
ズんげんばく』『横断歩道』
怪談はない。子どもたちは、祭りのために『おばけ屋敷』
を工夫しつつ作っていた。でも、観念の世界がジメ
ジメ、暗黒、等のイメージから切り離されてはいるから、コ
ライものの堂々と口にできる。
ほんとにこわいものは口にするのもコライのだが。
（名古屋大学）
ふくろうのつぶやき

ことばはおしみおしみ

真壁 伍郎

私たちの文庫にも、時々、お客様が来てくださいませ。
子どもたちの本にかわわりを持っている人。文庫をやっている人。
今何をやっているのか、興味津々でやってこられる人。さらに、
人の出入口の多い私たちの家をたまたま訪ねてこられたばかりに、
文庫の子どもたちにも見えという人もおられます。
文庫は、どんなお客様も歓迎します。ただし、「ただ見」はできないことになっています。だから、お客様にも何かお話をしていたいただきます。絵本の読み聞かせでも、昔話の話るのも何とよくございます。これを私 Размер関係の大きい読書に向けた。市役所広報担当の方が伝え、例では「きょうたま」を活用しておられる方々の一つ、子どもたちにお話していただけませんか。それが私のことでもわかりますから、子どもたちに話してくださりお願いします。

いつか読書週間の頃でした。市役所広報担当の方が伝え、例では「きょうたま」を活用しておられる方々の一つ、子どもたちにお話していただけませんか。それが私のことでもわかりますから、子どもたちに話してくださりお願いします。

「どんなお仕事をしているらしきのかかもしれないです。子どもたちにお話ししていただけませんか。それが私のことでもわかりますから、子どもたちに話してくださりお願いします。」

その日、私と子どもたちは、市役所広報担当の方から、子どもたちにお話していただくことができました。その時、子どもたちは、お話をしようとしていたのです。それも、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がってしまいました。子どもたちは、子どもたちの前で、すっかり上がてしま

子どもたちも、大人と一緒に暮しながら、その大人が日常何をしているかとなると、ほとんどに何も知らないことが多いのです。社会の仕組みだから、人々の暮しと仕事など、あれこれ学校で学んでいるはずなのでですが、社会の具体的なことはまるで図鑑の中の絵を見ているような印象しか持っていません。

なぜ、子どもたちが学校に通っているかは、他人のことを無関心なんだろう。こんな子供が、社会に必要な人材になるかと疑って寄せてきたのです。それは、言葉としては立派ですが、それがいつまでつづくか、どうなるか、子どもたちの文庫は、本と出会うだけではなく、人とも出会う場所にしようと考えてきました。

教育の目標にあらわれる、子どもたちの社会性を育て、いつも思われます。そんなわけで、わたしたちの文庫は、本と出会うだけでなく、人とも出会う場所にしようと考えてきました。子どもたちの文庫は、本と出会うだけでなく、人とも出会う場所にしようと考えてきました。

教育の目標にあらわれる、子どもたちの社会性を育て、いつも思われます。そんなわけで、わたしたちの文庫は、本と出会うだけでなく、人とも出会う場所にしようと考えてきました。
感じ、将来の夢をかけ立てられるようです。自分の仕事に喜びをも、打ち込んでいる人は、みんな話るべき内容をたくさん持っていてあります。いろいろな人が文庫に来て話をくわだたのを聞いていて、いつもそれを痛感しています。

家で、お父さんの仕事の話をよく聞いていたのでしょ。

「ぼくおおきくなったら、大工になるんだ」

と誇らしく、「なんでも話していたのを思い出します。

子どもたちの前に立って話をするとなるならば、わたしたちは

以下もたれ、それをできるだけ分かりやすく説明しようと

あります。その振り返りと、説明のための努力が、なかなか

かすらしい。

ある助産婦さんは、赤ちゃんが生まれるときの様子を話

してくれました。実際に見ておられるところですから、話

が生れたときのことも、あれこれ想像していたに違いない。

助産婦さんの仕事の大切さも分かったでしょうし、自

分も、お母さんの思い出を目撃しました。そんなときも

赤ちゃんが無事にやってきたことは、みんなの信じたこと。

 behandelt.  Il était temps de parler du.

彼が生まれたときのことを、いったいこのお母さん、お

さんが大変だったこと、どうしてこの中にいるのか、

遠い海外で医療のために働いてこられた人との話も聞き

ました。インドやネパールのこと。古切手を集めたの

が、このお医者さんや看護婦さんとつながっていたのか

ことに思いをはせました。

外国からのお客様もあります。わたしの通訳を交え
て、その国の風土や、学校、子どもたちのこと、そして
その国の面白い話を还记得あります。実際に耳で聴けば、
外国人も、そう思わないものです。二人のスウェーデンの
人が来たときなどは、スウェーデン語と英語
と、日本語の移しの話と感じたことを、詳しく
聴くことができました。橋の下に住むトロルの姿が、子
どもたちは、一層よく覚えてきたでしょう。

こんな言葉があります。

発見の旅とは、新しい風景を探すこと、新しく、
新しい目的で、他人の目、この地球を見るのです。
人の他人の目で、百の新しい地球を見るのです。
本当にそうですか。何ひとつ、世界を見たことはな
いとよく言われます。百聞は一見にしかずという思い
割れています。いっぱい日本人の視覚を育たないペ
いが見えません。百聞は一見にしかずという思い
割れています。いっぱい日本人の視覚を育たないペ
いが見えません。百聞は一見にしかずという思い
割れています。いっぱい日本人の視覚を育たないペ

でも、人の話することは耳を傾け、聴こうとすることで
見えます。しかし、その「聞く」も、単に音の外から聞こ
えてくるということ。聞ける方ではなく、「聴く」の文字
が示すように、耳、ブラス、目と心、つまり、耳だけで
なく目と心をまったたく相手に向けて理解しようと耳を傾
けること。カウンセリングでは、この「聴く」をとても
大切なこととして、「聞く」とは区別していません。
さいわい、子どもたちは、お話に耳を傾けていると
き、だれに教えられなくとも、おのずからこの「聴く」を
実践しているように思います。それほど自然に、語られ
た世界に子どもたちは入り込んでしまっています。す
から、子どもほど語りの世界に近い存在はないかもしれませんが

それははじめて、わたしたちは異なる世界に共感し、泣く

— 28 —
子どもたちのことを知り、世界大、いや宇宙大の思想をもつことができました。カントにとっては、奇人がいた話である。何よりも人の話をよく聴き、回らなければならないです。恐らく、子どもたちの話をよく聴いたことによって、ほとんど多くの他人の目で、世界を見ることができたのでしょう。

「そうですね、いっけ、はよ、はなししないかな。そうですね、いっけ、はよ、はなししないかな。」子どもたちの声は、前書きが多すぎます。また、長すぎます。小学校のこちらで聞いた校長先生の話など、後になってもさっぱり覚えていないのです。

前書きが長すぎたせいもあるのかもしません。子どもたちのまえに立ったら、すぐに本論に入りましょう。本当に面白い話なら、なおさらそのことが大切です。

どうしたの、おはなしですか。男の子の声は、子どもたちのまえに立ったら、すぐに本論に入りましょう。本当に面白い話なら、なおさらそのことが大切です。

子どもたちの声が、あるとすかすか、男の子の声。おじさん、声がちがうよ。
教訓を述べている声が、楽しくお話を語っている声と同じではありません。子供の耳は敏感で、全く違う喜びを感じ、その子は本能的に拒否したのです。響きの違う声を、その子は本能的に拒否したのです。せっかく楽しく、そして、心を動かされたお話をいまさら、さて、この話は、などと、あれこれ言われるのはありません。子どもにとって大迷惑なのです。

お話しは楽しむだけでなく、深い、暖かくておきたいのです。話し方、一人ひとりが必要で、そこから汲み取ればよい。考えさせ、感動を誇るようなお話なら、いくら気軽にても汲み尽くせないような表情が、そこにここんと湧いているはずです。子どもにとって大事なのですね。

「声がちがうよ」の指摘を、まことに痛い指摘でしょう。子どもたちが、自分はどんな声で話をしているかを思うようになりました。

ドイツの大学の医学部で教えていているわたしの兄から面白い話を聞きました。対等の関係を重んじるお国柄です。そこでの実験で、自分たちがより力が関係で押し通しているのが言えないと、あてで恥ずかしい思いをします。いい加減な言い方を、見えない力の関係で押し通しているのです。
ます。どんな下手な発音でも、相手はちゃんと聞きとっ
やったらいいのでしょうね、とたずねられます。朗読と
てはいる。話す力の関係が働き、そして、その関係を利用しようと
すれば、わたしたちの言葉も、声の調子もどんと変わ
ってきます。親子、夫婦、きょうだいの上下関係、学
校の教師と生徒、会社の人間関係、どこにここにも、
この言葉の調子と響きの奇妙な使い分けが満ちていま
す。『裸の王様』ではありませんが、子どもたちだけ
が、その微妙な違いをはっきり聞き分けていているのか
もしれません。子どもたちは、心のなかでしがりに言っ
ていることでしょう。

〇〇さん、声がちがうよ！
この著者のルジュモンさんは、どんな劇的な調子で語られたのだろう。デビュー以来となれば、誰しもそんな疑問を持っていたし、わたしの手并于にその周りのテープがあります。それ聞いてふむふむ。案に相違して、その語りは単純そのものです。淡々と、低めの声で、静かに語っておられま
す。うぎとりしい抑揚や、テンポの激しい変化はありません。それを聞くときには、どう声に出して読むかよりは、どれほど読むときには、どう声に出して読むかよりも、それほど
自らの朗読をなさる女優の長岡輝子さんには、いつかその秘密のない言い方をたずねました。そうしたら、おっしゃるには、詩を
訳むときに、どう声に出して読むかがよりは、どれほど
子ども本ならだれでも読めると、行き当たりばったり
に本を取り出して、読み聞かせをするという人がいま
は、不思議といわれるほどありません。読むでやるなら、ま
ず自分がそのイメージを深めること。細かいいつも
ては、いっそう思い浮べることができれば、語られる世界
は、いちいち思い浮べることができれば、語られる世界
は、いちいち思い浮べることができれば、語られる世界
は、いちいち思い浮べることができれば、語られる世界
は、いちいち思い浮べることができれば、語られる世界
は、
です。一場面一場面、言葉にイメージを添えながら話を進めるとなると、読む速度もそう速くはなりません。どうしよう、その物語に即した、読みの速さというものがあるようですね。

心を考えるとは、そうしたことです。声がよからうが悪いからが、自分が楽しんで、深く味わっている世界は、そのまま子どもたちにも伝わります。これを話すい、それはなくて、「語り」であると言えます。言葉に舌と、言葉に心が込められている。

何歳になっても、読むのは楽しいものです。それであれば、何歳になっても、読み聞かせを聞くのは楽しいはずです。文字が読めても読めなくても、心を込め読んでくれる人がいれば、その人の存在が嬉しいし、その物語も生きていきます。

わたしが昨年訪れた、スイスの女流詩人、ホールさんは家庭でもそうでした。高齢になっても、詩と日々の家族でもそうでした。高齢になっても、詩を作り日々の家族でもそうでした。

つきのことは、あくまでおしみおしみゆうべし、良寛の有名な言葉を、ふくろうがつぶやいています。

おしんとは、慈しみを込めること。愛のない言葉は語るのしようとは、慈しみを込めること、愛のない言葉は語るのだろう、良寛がみずからの戒めとした言葉でした。それは、良寛がみずからの戒めとした言葉でした。

（新潟大学医学技術短期大学部）
子どもの会話（その三）

無藤 隆

幼児を、幼稚園の中の子ども同士の付き合いの中で、様々な会話を交わしている。そして、互いの意志を通じさせることが特に強く感じられる場面に、子ども同士のいさぎさのある。いさぎざやけんかの場面こそ、子どもにとっ
たときの喜びが感じられる。さらに、そこから人間関係や人との交渉の技術、さらに他者の人の立場に立つことなどを学ぶのである。そこで、今回は、幼児特に5歳児

例1
A と C が積木遊びをしているところへ、B が来て、積木を取りっていく。
A ええ、駄目だよ、これは。B の所へ行って取り返す。
B じゃ、これは？（別の積木を取る）
A だめ。
B じゃ、これは？（別の積木を取る）
A いいよ。（B は積木を持っていく）
B それ、とちゃ駄目だよ。（それはね、とんな
C あ、それ、とちゃ駄目だよ。それだけ、あきらめて自分のグル
B ええ、これが使わるの。あきらめて自分のグル
（取り返しに行く）
A 今は、手に持ったりしていってはっきりと使っていること
先に使用した者が引続き使用する権利を持つという慣
例。幼稚園などの公共の場では、通常「先占権」とま

この例で、B は手に積木を取り行って行っているようだ
が、そうではない。使っていないものだと思ったのであ

現に手に持ったりしていってはっきりと使っていること
が分かる。仮に使い方を求めるという慣
例。幼稚園などの公共の場では、通常「先占権」とま

B はあきらめる。
例2
（Fが積木で遊んでいるところへHが来る）
F：「いっれーて。」
H：「何でいっれーって。」
F：「もうだめ。」
H：「うーだめだ。」
F：「达が積木で遊んでいるところへHが来る」
H：「どうするの？（積木を受け取って、尋ねる）
F：「そう。（二人で積木を並べ始めめる）

H：「こうするの？（積木を受け取って、尋ねる）」
後の理由を含み込ませているようだ。
Fは、しかし、Hの反問に対してすぐに受け入れるこ
tに変わらない。しかし、「待ってよ。」だから、「という
言い方で、初めから仲間入りを拒绝したのではなく、待
ってもらっていたのだと自らの意図を変えてしまってい
る。そのことで拒绝の理由を述べる必要もなく、スム
ースに遊びの指示を与え、仲間となっている。
このように、遊びの世界の周辺的接触（例1）ばかり
でなく、遊びの世界への参入もまたいささかの発生因と
なる。さらに、当然のことながら、遊びの世界の中にお
いて、その進める方をめぐっていささかは発生する。次の
例を見よう。
B
「誕生日会やるか？」
E
「うん。
 gutsいよいよ。」
B
「ええ、そんなことで泣くなよ。 võちに座ったく
ないんでしょ？（Eの顔を見て）」

例3

二階に作った車の席をBが勝手に決めてしまう。

E
「すいません、わしん。（泣く。）

この例では、遊びの中で互いのやりたいことが同じで争
うことには、遊びの中で互いのやりたいことが同じで争
う。それでも、互いは協力的に取り決めてしまう。この
場合、話し合うことによって、互いの協力が必要で
ある。よって、確認され、是認され、共有されることが
必要である。Fig.3のような言葉が、その規範からの逸脱を非難するため
の、認識された言葉が、その規範からの逸脱を非難するため
に用いられている。
BはEに泣かれたから、相手にそうしているの
だということを相手に身振り・視線によって伝え、強調
している。そして、事実相手の希望に従って変わってい
る。
二、いざこざの交渉の過程

幼児のいざこざの場合、原因は何か、が悪いのかの議論は、年長ぐらいで見られるようになる。特に深刻なけんかで、回りの子や先生が介入した場合がそうであらぶ。しかし、ここでいま分析している軽いいざこざの場合、子どもの興味は、いざこざに乱れた遊びの世界を立て直すことにあろう。進調に還展していった共通了解の世界が一時的に乱れ、進行が止められる。そこで何とか修正して、共通の了解を作りだそうとする。乱れは、主に遊びの進行について出来ない。

例4

D 達が階段作りをしている所へBが来て、手伝うことになる。
B いくらよ。（Dが今まで作ってきたのを崩そうとする）
D 壊さないで。（BはDが今まで作ってきたのを崩そうとする）
B 手を当てて怒る。
D いけないのよ。（Bを叩く）
B だからこれ。（Dが今まで作ってきたのを崩そうとする）
D だからこれ。（BはDが今まで作ってきたのを崩そうとする）
B それじゃ、これがちゃんと乗っていればいいんだよ。（積みに段をつけようとする）
子ども理解と内時間意識

樫沢 良彦

(1) 他者を理解すること

私たちが日常生活を営んでいる社会的世界は、客観的な意味と主観的な意味の織物を成している。そのため私たちの理解には様々なレベルが存在することになる。相手の真意を正しく理解することもあれば、誤解することもある。私たちは純粋に客観的な意味の理解のレベルに留まっていることもできるし、それはそれなりに

— 40 —
社会生活を可能にしている。しかし、他者をよりよく
より深く理解しようとするなら、私たちは主観的意味の
次元にまで降りて行かなければならない。

行為の主観的意味を捉えるということは、言い換えられ
ば、「他者の固有な世界を理解する」ということであ
る。このような考えを受け入れるためには、私たちは
皆同一の世界に生き、同じ物を見、同じような考え方を
している」という素朴な信念を捨てなければならない
この信念が決して誤りというのではなくが、私たちはそ
れぞれ異なった世界を生きている。このことは日常生活
をもっと反省すれば明らかである。例えば、睡り物
している人にとっては見るものすべて色あせて見えるだ
ろし、何をしても楽しくなく、興味を引きかれるものを少
ないだろう。逆に心を浮かせた時には、周りのものすべ
てが興味深く見えるだろう。このように、気分状態によ
って一人の人間にとってさえ、世界的相貌は異なって見
えないのである。精神病理学者のヴァン・デン・ベルクは
の期待、予期、後悔はミンコフスキイが「生きられる時
間」と呼んだものであり、また、フッサーの観点から
いずれも「内的时间意識」の領域にあるからである。
時間は人間にとって本質的な契機であり、存在論的基盤で
あるが、そのような立場からランゲフェルドは人間存在
を異時間重複性と定義づけている。人間は未来と現
在と過去の統一された時間を生きることで、固有の有意
味を世界に構成しているのである。そのように人間が生
きている時間も内的时间意識に関わっている。人間が自
分の行為を企図し、体験に意味づけし、固有の世界
日常、私たちが他者と対面状況にあって直接的コミュニケーションをしている場合、相手の内面時間意識に目を向け、主観的意味を把握することは比較的容易である。他者を理解するためには内面時間意識に目を向け必要のあることを述べてきたのが、次にそれと関連から具体的事柄を取り挙げ、日常的な理解のあり方の一例を提示しよう。

未来は変化する

ニケーションをしている場合、相手の内面時間意識に目を向け、他者の行為の主観的意味を理解することとは、私たちが他者内の時間意識を理解することにかかっている。と言えるだろう。このように理解の仕方をうかがってている。

以上、他者を理解するためには、内面の時間意識に目を向け必要のあることを述べてきたのが、次にそれと関連から具体的事柄を取り挙げ、日常的な理解のあり方の一例を提示しよう。

M夫は登校早々、「公園、公園」とI先生にしきりに言った。公園に行きたいのだ。やがてM夫はI先生と地下室に行ってしまった。その間に、担任のK先生は彼を連れて公園に出て行っていた。M夫がホームに戻ってきたとき、私は「Mちゃん、K先生公園に行ったよ」と教えてあげたが、M夫は「もう公園に行かない」とほんとはしなかった。

（昭和七年六月六日）
M夫は登校早々公園に行きたい様子だった。実は、前日M夫は公園に行きたい、とK先生に要求し、それを止められ、その替わり、明日必ず公園に連れて行く、と約束されてのだった。従って、M夫はこの日、公園に行こうと期待していたのだった。M夫は公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園に行こうと期待していたのに、K先生が早々に来た。K先生は、M夫が公園を行
の\n\nのように、M\n夫の気持
とそれに
ついての
私の把握ら
のずれが生じてしまった理由は、私が地下室でM\n夫の
経験に立ち会っていなかったことにある。地下室で様
なことをする間にM\n夫の経験構造は変化し、必然的に生
した未来（の出来事）の意味と、時間が経ちある経験をし
た後にM\n夫の前に現われた未来（の出来事）の意味とは
とで変化してしまったのである。そして「公園に行くこと」
のM\n夫にとっての意味で、登校時にM\n夫が見てい
た未来（の出来事）の意味と、時間が経ちある経験をし
た後にM\n夫の前に現われた未来（の出来事）の意味とは
とで変化してしまったのである。それから、「公園に行
くこと」としての未来の意味は、時間点で固定されていることになっ
て、保育者と子どもが一体となることになる。保育者
は、たとえ子どもと一緒に行動したとしても、決して完
全に子どもの経験を理解することはできない。保育者
は自分の目で子どもたちの行動を観察し、子どもたちの
行動を共にしない場合にも、保育者の理解は不十分にな
らない。子どもたちの経験が時の経過につれて変容し
ている出来事や物事の意味が潜んでいる経験に固着し
ている。これを探すにあたり、子どもたちの経験に目を
向ける必要がある。子どもたちの経験が保育者の経験構造を変えてしまい、意識が
変容し、そのものが問める興味が薄らいでしまったからなのか。
保育者が子どもの内時の時間意識に立って子どもを理解するということは、考えてみれば当然のことなのであるが、必ずしもそのようにできていない。時として、子どもを無時間的存在として捉えてしまうこともある。それゆえ、私たちがしっかりそういった見方に陥っていると思うわされる場合を、多少図式的になるのが、検討してみよう。

一般に子どもが一つの活動（お絵かき）に熱中した後の別の活動（トランポリン）に移ったりするとき、「お絵かきにあきら」という言葉によって子どもの姿を必ずしも否定的に評価しているわけではないだろう。なぜなら、日常的言語使用において、この言葉には否定的意味合い合いが込められている場合がある。例えば「あきら」子どもの活動がどのように活動したかということは子ども内時の時間意識に即さずに、行動が「あきらい」というように理解している時、私たちは子どもをどのように理解している。そのように理解している時、私たちは子どもたちがどのように関連をもっているか。

この場合、子どもの活動は時間的配置され、物理的時間に属する「もの」のように見えている。諸物自体は相互に何の関連も持てない。それ自体として存在する活動の間を子どもが気ままに飛び移っていると捉えられている。
のである。このような提者は八空間的提え方である。八時間の次元が欠落している。つまり八経験はいくつの時間的契機が見落とされているのである。

活動の過程で主体は経験をし、意識は変容していく。主体の経験構造、生の関連は活動の過程で変化していくのである。従って、同一の事柄例えば一冊の本でもよいし、公園に行くことでよい、その持つ意味は活動の過程で変化していくのである。八一つの活動をしたVというようなことは八経験を積んだVということなのであり、それにより子どもは次の活動へと動機づけられて行き、同一の事柄をささっとは異なった意味を持っているものとする。なお、子供がEという経験構造を有している」とする。仮に子どもがEという経験構造を有しているのであれば、それはその地平に立ってAという活動をするということにより、EはEへと変容し、そのEの地平に立って子どもは新たな活動Bをするのである。このように子どもは新たな活動Bをするのである。八経験の中から無作意に一つを選択しているのではない。子どもの事柄をEという経験構造を有しているものである。以上の説明を図式化してみると次のようになるだろう。

心の対象となっているうえ、その道をまた起こり合うのである。

子どもはA、B、C、Dと活動を展開していく。彼は活動Dに臨む際にはAからCまでの経験を、つまり歴史を通してDを見ているのである。子どもから子どもから隔たって単に彼の活動を見ているだけの場合、保育者は子どもたちの歴史に立ち会っているために、活動を単なる出来事の続きとして、相互に孤立したもののとしてしか見ることができない。個々の活動をしたもののとしてしか見ることができない。子どもたちの生の関連の中に十分位置づけることができない。個々の活動をしたもののとしてしか見ることができない。個々の活動をしたもののとしてしか見ることができない。個々の活動をしたものが経験として現れるものをとして見ることができるのである。

一方、図IIの場合、保育者は子どもたちの歴史に立ち会っており、内の時間意識から個々の活動を相互に関連し合った意味のあるものとして見ることができるのである。図IIのように保育者が子どもたちと共に活動することである。
子どもの活動

A → B → C → D
★ --- → ★ --- → ★ --- → ★

保育者（図Ⅰ）

ここで言う「主観的意味」の活動の変化を意味である。行為者自身が子どもの生活間隔から離れてしまうことも事実である。その意味で子どもを理解することも絶えざる努力を要することである。

（注）

行為者に付与する意味であり、「客観的意味」とは、行為者自身の意識から切り離され、一般的に与えられている意味のことである。この問題に関する現象学的分析は、A・シュップ「社会的世界の意味構成」。
あるインコの話

ペットじゃない、友達なんだ——こんなフレーズのCMがあったように覚えてている。また、折から夏休みのシーズンとあって、犬やラッコやきつねやの動物映画が盛んに上映されている。一体、人間と動物の関係、つながりというものは何なのかだろうか。動物の心を少しでもわからることができのだろうか。そして友達になれるのだろうか。

私があるインコに出会ったのは、今から六年以上も前、高校二年の夏休みの終り頃だった。その頃私はいつもやろいと辛いことがあって、自殺の願望が募り、日に日に

桜井敬子

— 49 —
ある日のことだ。私と「かー」はかなり仲良くなっていたのだが、二人とも一階の居間で長いこと遊んでいたのだ。じゃれたり、葉っぱを食べさせたりしているうち、人間たちは夕食をすませ、すっかり遅くなってしまった。

「かー」がいつか、私達に飾ってテレビに熱中していると、「かー」がいつもなまわってくる。私のところまで歩いてきて、見上げる私のことを見つめ、「ちゅん」と鳴く。そんなことが何回かあったのに、戸かたの私は「かー」も随分なついたものだがまんざらでもない。しかし、そのうえで「かー」は私のところへ来なくなったり、居間の隅りにあった台所を通って、まっ暗な廊下を歩いてくると、私がつくれても、またその暗い廊下の方へ行き、次に見つけたときは廊下を通りぬけて階段の下まで行き、そこで玄関の脇にある階段を上りきった。このとき、私の家の構造を見事に把握していたこと、台所を経て廊下を渡り、玄関の脇にある階段を上りきったこと、自分自身の振り切ったこと、ときに理解していた、ということが全部で「かー」という「人格」を支えていること、独自の知力と意思力を支えていること、私の存在である。「かー」と友達になったこと、私達の心の主として生きている存在である。「かー」は、「ちゅん」と鳴くこと、独立した意思の持ち主として生きていること、良くしてもらいたい、と思うようになったのである。
こうして私達はいつも一緒にいて、互いにじやあ
ついているという。かわり親密な関係になった。ピアノを
ひくと「かー」はすぐ飛んできて、音にあわせて踊っ
た。指でつくると「かー」は、何とも表現しようのな
い微妙なリズムでステップした。庭に水を撤くとき、外
につれて出ても「かー」は私の傍を離れず、足元でア
リを食べたりしていた。お風呂に入るときも一緒で、あ
るとき誤って湯ぶねに落ちたが、羽をひらげてぶかぶか
浮いていたが、その時は、ときどき自分から湯ぶねに
浮いていた。カゴの戸はいつもあいていたの
飛びこんできたりした。カゴ戸がいつもあいていたの
で、「かー」は家の中を自由に飛びまわり、私が勉強し
ていたように思う。

おまけに、私達には共通の言葉ができ、言葉でコミュニ
テーションすることができるようにになった。それは、
「かー」の発する「かーちゃん」「けーこちゃん」という
二つの音声だ。勿論、「かー」が、この二語の意味を理
解していたとは思えない。彼女の耳によく入る言葉をた
だオウム返ししているうえに覚えてしまったりしただけのだ
ろう。ただ、さっきがその言葉を、特殊なものとして、
自分のさえずりとは別の、何らかの意味を持ったものと
して使っていたことは、ほぼ間違いがないように思われ
る。なぜなら、彼女がこの言葉を使うのは、必ず私の何
かを要求する時だったからである。「エサがないよ」「水
を変えてよ」といったとき、必ず「かー」は、「かー
ちゃん」「けーこちゃん」と言った。それ以外の何か緊
急事態が起きると、「かあちゃん、ああん」「けーこちゃん、あ
ん」と全く人間が呼ぶように、大きな声で叫ぶ。彼女が
ただオウム返したこの言葉を使っていたのでないかと
は、私が毎朝「かーちゃん」（お早う、ご機嫌いかがの
意）と言った。必ず「けーこちゃん」（今日元気よ、
あなたは？の意）と応答したことはも明らかだ。も
もっと私が「ケ－こちゃん」と言うと「か－ちゃん」と言っていたから、二つの言葉が二人の名前だなんてこと、全く考えもしなかったということかも知れない。

私がとってはとても幸福な日々だった。私の心は大きいに慰まれ、「もっと「か－」と伸良くなっていた。本当に会話がしたい、と心から願っていた。しかし、私の心には早くてはならない存在であることは、他者共に共有を認めるところであった。「カ－」は私の子供であり、友達であり、会話がしたい、と心から願っていた。「カ－」が私を何かの大きさが感じた。なぜなら、私も私が彼女を支配するものでしかないのか。それなら、私は何かの大きさがあり、支配者と支配者の中に、本当の会話が成立ったわけではないから。支配者がいくらい愛しているか、と思ったとしても、それは強い立場にあると思われる。私が彼女を愛していると決めたとき、私は彼女が支配するものではない。私は真剣に悩んでいた。「カ－」とは何か、家庭の存在は細部的なものではない。生活のよさを他人に伝える者がその人におぼえることなく、心を自由に持てる者はいないのだ。夫が給料を入れてくれなければ、その目から利益に迷うしかない彼女は、精神的に自立できることなく、相手が他人に依存する者がその人におぼえることなく、心を自由に持てる者はいないのだ。夫が給料を入れてくれなければ、その目から利益に迷うしかない彼女は、精神的に自立できることなく、心を自由に持てる者はいないのだ。夫が給料を入れてくれなければ、その目から利益に迷うしかない彼女は、精神的に自立できることなく、心を自由に持てる者はいないのだ。夫が給料を入れてくれなければ、その目から利益に迷うしかない彼女は、精神的に自立できることなく、心を自由に持てる者はいないのだ。夫が給料を入れてくれなければ、その目から利益に迷うしかない彼女は、精神的に自立できることなく、心を自由に持てる者はいないのだ。

ある者が、か弱い者を慰めるものしているにすぎない。
ソコになってしまったか。自分が客観的になる「かー」と支配しているという事実。従って「かー」は客観的には私の「愛物」にすぎない。という事実を認めたくなかった。この想い、ひけめは決して消えることではない。

時々「かー」は窓ぎわに立って、外を見ていることがある。そんな「かー」の後ろ姿を見ると、私は心が痛んだ。「いくら家の中を自由に飛び廻るといっても、所詮は大きなカゴに閉じこめられていることに変わりはない。かーは、本心では、大空に飛びたいわけではない。

ただ、この問題は「かー」の気持ちがわからない以上、性急に私は「かー」を空に放つことはするまいと思っていた。もちろん後に「かー」は、エサを確保するため、私の気に入っているかもしれないからだ。今まで逃げるチャンスはいくらでもあったのに、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようにななければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになけば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわかるようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになれば、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないようになければ、いつか「かー」の気持ちがもう少しわからないような

— 54 —
「一」の元を追って考えてみる。佳作のさわめて高い評価を受けていた「一」は、その後の研究者たちにも大きな影響を与えた。
おっしこ、おもらし、そしてお弁当

牛山 佐智恵

この春、私はこれまで勤めていた幼稚園を退職しました。保育のこと、ひそかに覚悟はしていました。が、いざとなるとやっぱり、それは隠せぬええことの退職適当でした。ただひつつの自由保育の園で、おばちゃん」として保育に参加させてもらっています。正式なスタッフではありませんが、ここでは、園庭のかたすみに私のいる場がありません。かたすみにいる私のところに寄ってくる子どもたちと、区切りのない一日を過ごすことができます。まる一日を共にしていけるという、ときおり、今までの私には、子どもたちとどんなときにおしっこを行くのか、頭の端にもないことです。これから記す記録は、おっしこ、おもらし、お弁当と、どれも当たり前として通り過ごしてきたことに、黄信号のついたような体験です。恥をかく勇気をふるいこしてつくってみたいと思います。

(1) はずむ気持ちとおしっこ

年少のAと初めて会ったのは、六月半ば。朝、庭の木
の下にひとりでしゃがんでいると、「なに見てんの？」と背中から声がする。小さな声。聞きと、「手にかばんと帽子を持った男の子がいる。」なに見てんか。「あ、声をかけては、いつの間にか立ち去る。私はそのうかがえるたびに、日に映るものを作りあげていく。」度の人言うえは、いつかよって近づいてくるので、「かばんと帽子、持ってあげようか」と私の方から声をかけてみた。その手はすっと私に伸ばされた。」「なに見てんの？」と近づいてきたのは、自分の持ち物を、まるで帰りるの切符のように手離さない。私手渡してから、ちょっとその場に留まることができて、持ち歩く子は、入園当初の年少児に似たような、自分も、自分の拠点となる大人を求めるものだった。事実、同足場に立つ者の共感、いわゆるかなつの心、同足場での生が受けているのだという事実を私に伝える。「お昼まで、年中の子たちとずっと泥だんご作る？」と言った。そして、そっと泥だんごに手を伸ばす。しかも、泥だんごはすぐにひっこめた。そして、あわててスプーンの後ろではらった。それから、急いでどこかへかけていった。
た—と言った。と、今度は「おっしり行ってくるね」と告げてからかけだしていった。おっしりから帰ってきたAは、驚いたことに泥水の中
に手を入れた、それほどからさらさらとした土をAの手
の平に渡し、その上から水をたらしていた。
そばにはいつの間にか年長の女Mが来ていった。'
「いつもA君は、どんなことやって遊んでるの？」
とMに聞いてみる。「なにもしれないで泣いったりなんかし
るよ」—とM。
ところが、その一言で、MはAへの対応を変えた。そ
までも、手に手にさらさらの土をたたましてAを応援
する手が集まって、この子たちの間に輪ができその
なのがさが生まれた。
そこで、そうした場面がはっきりと現れた。ま
す様子を見て、どうやるのかを
でなければ、とでもこうはいかないだろう。
ところで、Aが泥に手を出すまでには、長い「しき
り」の時間が要った。まず様子を見て、どうやるのかを
確認して、それからちょっと試してみた。というよう
に。立ち上がる前の最後のしきりが、「おっしりこ」。遊び
のきっかけをつかんだ後、Aは「おっしり」で一呼呼吸お
いて、「さあ」と言わんばかりに泥遊びに入った。
これ後で気づくことだが、私はそう口数の多くない
この子から、一日に一度ずつ「おっしりこに行ってくる」
ね—を聞いている。それはいくつも、この日同様「さ
あ、よいよ」と腕まわりするようたどってきた。体のほ
みとおっしりのはずみ、それはすでになものを得て、不
要となったものを心残りなく捨てるように似ている。

【2】がまんの限度とおもらし

七月初め。朝、顔を合わせるとじきにAがやってきた。
それはから年中の女の子Sがやってきた。
「これ、描ける石」とSがレンガの破片を拾う。Aも
この日はぐぐぐとレインガレ線を描いていく。そのうち、その破片はパックと捨てたかと思うと、おしっかり行
っているね。
ところが、おしっかりと帰ってきたAは、背中にでき
ていた発疹を急にかゆがりだした。私はAにつきこ
って走っていたうちに、Sは「本を借りてくる」と言
って行ってしまった。後から加わっていた年中の女の子l
も、本を借りに行った。この日は週に一度の貸し出し日
だった。
Aの発疹に薬をつけて戻ってみると、Sたちはまだだ
った。しばらくして戻ってきたSは、私の方にしきりに
体を寄せてきた。しゃがんでいる私の膝にお尻を乗せる
ので、こちらは体がぐらついてたまらない。
私は思わずそう言ってしまった。
「なにして遊ぼう」
Sは「たかおに」と言う。そう言ってきた体を寄せて
くるSに私は耳を寄せた。すると今度は「おかあさんこ
く

— 59 —
「いただことおかあさんごっこなら、一緒に遊べていね」と私。
「おはちゃんおかあさん、わたしごおねえさん、そこから・・・」とS。

四人集まりで庭の方へ出るうちに、役割もあっていこうと決まって、遊びがすれだけだそうな気配だった。落ちつき先は、庭のはずれの隅。木の下に枯れた葉っぱを見つけて、まずは「あっ、まぜこはん作ろう」とS。

私も一緒に泥と水と葉っぱを混ぜ始め、落ちつく先は、庭のはずれの隅。木の下に枯れた葉っぱを見つけて、まずは「あっ、まぜこはん作ろう」とS。

Sは「コーヒー作る」と言って、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土を入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいくて、水に土入れて、ちょっと手もぶかれたといいう
と、Sが「まだなのか？」と言っていた。私は思わず
「あれっ、来ちゃったのか？」と言ってしまった。
そのときだった。Sが「あっ、おもろしそうだった」
と立ちすくんだのだ。Sは「あっ、おまわりさんが出た。
Sのたまりにたまったおっしりを前にして私もまた立
ちすくむ思いだった。Sは「おもろしそう」で、私の方は
ぐるな対応に「もうがまんの限度」と言っているような気
がした。この光景はまだ、今まで忘れていた自分のおも
らしを思い起こさせるものだった。
私は小さいころ、よくおもろしをした。その記憶は、
私の小さいころ、よくおもろしをした。その記憶は、体中から力という力がぬけていくような感じとして残っ
ている。それは、「失っていく感じ」という。今でも、そのような感じは私個人のものでしかない。
こともないので、この喪失感は私の個人のものでしかない。
もともと、おもろしをしたときの感じを人にたずねた
のかかもしれない。しかし、Sとのやりとりをふり返る
と、やはり、思えるものがある。
Aの発疹騒ぎからというもの、私はSにまともにつき合っていない。Sがうれしそうな顔をしたのはただの一時の体を寄せてくるの子に耳を寄せたときの「ないしょ」だけだった。
この日のSは、最初からいたにかかわらず、いわば「出遅れた子」だった。発疹をかかっているAにつきあっての私。その間に本を借りに行っての中断。しっかり体を寄せてきたのもうすぐできるコーヒーを作って、ふるまる中気持ちを向けたのも、中断をとりもどそうとする願いからだったような気がする。
そこで考えたのが、ねえ、できるコーヒーを作って、ふるまる中気持ちを向けたのも、中断をとりもどそうとする願いからだったような気がする。

Sのおもらしい、私は自分のおもらしいを再体験した気がする。おもらしい、失うかもしれない、不安、奪いとりられるかもしれない不安、置き去りにされるかもしれない不安、不安の前で、意図反してもらうものを手離してしまったことなのではないかと思う。

私は今でも、一番大切なものを見失いそうな不安におうぬがまんを強いることになったのだろう。そのまんの限界で、Sは私のところへかけよってきたのだ。とところが、あっけ。来ちゃったの？とすげないうにかかったことか。そのかかったがおらしだったように思う。

(3) 大人の隣りとお弁当の力
十二時近く、やっとお昼になった。ごはんの上に並んで座った四人の子。SとIが「ここ、ここ」と自分の隣りに私の席を指定する。Aは「ひとりで食べたい」と言

にしろSのおもらしい帰りのこと、私もどうにかして「みんなの隣り」に座りたい。しばらく考えてつくった
（時代の背景）

このPDFの内容は、日本の歴史的な背景を示しています。特に、戦後の日本の社会変革や文化的な影響について詳しく説明されています。特に注目すべきは、戦後の経済復興の影響と、それにより生まれた新しい社会構造に関する内容です。

（詳細内容は上記PDFを参照のこと）
スペースにマッチ。予算にマッチ。子供の気持ちにぴったりマッチ。

フレーベル館のオリジナル図書室システム誕生

セット例（Bセット） 合計507,000円

組み合わせ自由。
夢は無限に広がります。

スペースに合わせた図書コーナー

幼児教育に実績をもつフレーベル館が開発した図書室システムは、現在あるスペースに合わせられる、システムパッチュです。組み合わせは自由自在、単品でも使えます。書架の図書コーナーから図書室の総合レイアウトまで、お好きな形でご利用いただけます。もちろんレイアウトの変更も思いのままです。書架とイス、テーブル、ソファー、マットなど必要な数だけをセットするわけではないから、費用の点でも余裕があります。

19種類の中からスペース・ご予算に合わせてお選びください。

システム書架・直線/システム書架・曲線/システム書架・コーナー/システム書架・合形/書架ワゴン/ソファーマット/アソファーマットB/ソファーマットA/六角L型ベンチ/大型L型ベンチ/小L型テーブル/書架ベンチ/書架/アンパンマン書架/大型回転マガジンラック/1連書架/1連書架/2連書架/2連書架/1連傾斜/2連傾斜/2連傾斜

フレーベル館が選んだバラエティ豊かな本のラインアップ

学校図書館選定図書を中心に幼児に適した本もフレーベル館で一括して購入できます。ぜひご利用下さい。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店にご相談ください。

子どもの心と明日を考える
キッズブックスの
フレーベル館
遊びの工夫がいっぱいで、子どもの心とからだを育むシステム遊具。

■特長
- それぞれの遊具は単体での遊ぶことはもちろん、スライダー（すべり台）やラダー（はしご）を連結したり、別のセットと組み合わせたりして、多様な展開が可能です。
- スペースや予算に応じた購入ができます。各年度ごとにパーツを追加していく計画購入もできます。
- 耐久性と安全性に十分配慮したデザイン設計です。
- 室内に明るくマッチする、生き生きとしたデザインです。

■生産物賠償責任保険付

総合セットコンビネーション例

| 総合セット 3025-10 ￥750,000 |

<table>
<thead>
<tr>
<th>ジャングルタワー</th>
<th>ろくほくステージ</th>
<th>アーチブリッジ</th>
<th>クライミングボード</th>
<th>スライダー</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>3025-01 ￥170,000</td>
<td>3025-02 ￥160,000</td>
<td>3025-03 ￥170,000</td>
<td>3025-04 ￥150,000</td>
<td>3025-05 ￥37,000</td>
</tr>
<tr>
<td>木製・ポリウレタン塗装</td>
<td>木製・ポリウレタン塗装</td>
<td>木製・ポリウレタン塗装</td>
<td>木製・ポリウレタン塗装</td>
<td>木製・ポリウレタン塗装</td>
</tr>
<tr>
<td>長100×幅110×高さ145cm</td>
<td>長120×幅120×高さ143cm</td>
<td>長180×幅180×高さ150cm</td>
<td>長17×幅17×高さ125cm</td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考えるキッズブック

フレーベル館